

III

学部・研究科等による 取組み

III-4 東京キャンパス

東京キャンパス学年暦 219

人文学部 221

学部レビュー

- 1 学生の受け入れ
- 2 教育課程
- 3 教育組織
- 4 学生支援
- 5 就業支援
- 6 研究活動
- 7 社会貢献
- 8 図書館〔東京〕
- 9 自己点検・評価
- 10 その他

2015 (平成 27) 年度 東京キャンパス〔人文学部〕 学年暦

4 月				5 月				6 月			
1	水		健康診断 1 年生オリエンテーションⅡ 学生証登録	1	金	③		1	月	⑧	
2	木		1 年生オリエンテーションⅢ	2	土	③		2	火	⑧	
3	金		入学式	3	日		憲法記念日	3	水	⑧	
4	土			4	月		みどりの日	4	木	⑨	
5	日			5	火		こどもの日	5	金	⑧	
6	月	①	前学期：講義開始	6	水		振替休日	6	土		体育祭
7	火	①		7	木	⑤		7	日		体育祭（予備日）
8	水	①		8	金	④		8	月	⑨	
9	木	①		9	土	④		9	火	⑨	
10	金	①	前期 履修登録（Sナビ）締切	10	日			10	水	⑨	
11	土	①		11	月	⑤		11	木	⑩	教職員健康診断
12	日			12	火	⑤		12	金	⑨	
13	月	②		13	水	⑤		13	土	⑧	
14	火	②		14	木	⑥		14	日		
15	水	②		15	金	⑤		15	月	⑩	
16	木	②		16	土	⑤		16	火	⑩	
17	金		新入生セミナー（2 年生のみ休講日）	17	日			17	水	⑩	
18	土		新入生セミナー（2 年生のみ休講日）	18	月	⑥		18	木		創立記念日（4/23）振替休日
19	日			19	火	⑥		19	金	⑩	
20	月	③		20	水	⑥		20	土	⑨	教職員特別研修会
21	火	③		21	木	⑦		21	日		第 2 回オープンキャンパス
22	水	③		22	金	⑥		22	月	⑪	
23	木	③	創立記念日（通常授業日）	23	土	⑥		23	火	⑪	
24	金	②		24	日		第 1 回オープンキャンパス	24	水	⑪	
25	土	②		25	月	⑦		25	木	⑪	
26	日			26	火	⑦		26	金	⑪	
27	月	④		27	水	⑦		27	土	⑩	
28	火	④		28	木	⑧		28	日		
29	水	④	昭和の日（通常授業日）	29	金	⑦		29	月	⑫	
30	木	④	花まつり（1 限）	30	土	⑦		30	火	⑫	
				31	日						
7 月				8 月				9 月			
1	水	⑫		1	土	⑮		1	火		
2	木	⑫		2	日			2	水		
3	金	⑫		3	月			3	木		
4	土	⑪		4	火			4	金		
5	日			5	水			5	土		後期 履修登録（Sナビ）締切
6	月	⑬		6	木			6	日		
7	火	⑬		7	金			7	月		
8	水	⑬		8	土	⑮	試験・補講	8	火		追試験
9	木	⑬	盂蘭盆会（2 限）	9	日			9	水		追試験
10	金	⑬		10	月			10	木		追試験
11	土	⑫		11	火			11	金		
12	日		第 3 回オープンキャンパス	12	水			12	土	①	後学期：講義開始
13	月	⑭		13	木			13	日		AO 入試Ⅰ期
14	火	⑭		14	金			14	月	①	
15	水	⑭		15	土			15	火	①	
16	木	⑭		16	日			16	水	①	
17	金	⑭		17	月			17	木	①	
18	土	⑬		18	火			18	金	①	
19	日			19	水			19	土	②	
20	月	⑮	海の日（通常授業日）	20	木			20	日		第 6 回オープンキャンパス
21	火	⑮		21	金		海の日（7/20）の振替休日	21	月	②	敬老の日（通常授業日）
22	水	⑮		22	土			22	火	②	国民の休日（通常授業日）
23	木	⑮		23	日		第 5 回オープンキャンパス	23	水	②	秋分の日（通常授業日）
24	金	⑮		24	月			24	木	②	
25	土	⑭		25	火		昭和の日（4/29）の振替休日	25	金	②	
26	日		第 4 回オープンキャンパス	26	水			26	土	③	創立 50 周年記念式典
27	月	⑯	試験・補講	27	木		成績発表（Sナビ）	27	日		
28	火	⑯	試験・補講	28	金			28	月	③	
29	水	⑯	試験・補講	29	土			29	火	③	
30	木	⑯	試験・補講	30	日			30	水	③	
31	金	⑯	試験・補講	31	月		後期履修登録（Sナビ）開始				

10 月			11 月			12 月		
1	木	③	1	日		1	火	⑪
2	金	③	2	月	⑥	2	水	⑪
3	土	④	3	火	⑦	3	木	⑪
4	日		4	水	⑦	4	金	⑪
5	月	④	5	木	⑦	5	土	⑪
6	火	④	6	金	⑧	6	日	
7	水	④	7	土		7	月	⑫
8	木	④	8	日	体育の日 (10/12) の振替休日	8	火	⑫
9	金	④	9	月	⑨	9	水	⑫
10	土	⑤	10	火	⑧	10	木	⑫
11	日		11	水	⑧	11	金	⑫
12	月	⑤	12	木	⑧	12	土	⑫
13	火	⑤	13	金	⑨	13	日	成道会 (3 限)
14	水	⑤	14	土	⑨	14	月	⑬
15	木	⑤	15	日	AO入試Ⅲ期・指定校推薦公募推薦	15	火	⑬
16	金	⑤	16	月	⑩	16	水	⑬
17	土	⑥	17	火	⑨	17	木	⑬
18	日	AO入試Ⅱ期	18	水	⑨	18	金	⑬
19	月	⑥	19	木	⑨	19	土	⑬
20	火	⑥	20	金	淑徳祭 準備日	20	日	
21	水	⑥	21	土	淑徳祭 第7回オープンキャンパス	21	月	⑭
22	木	敬老の日 (9/21) の振替休日	22	日	淑徳祭 第8回オープンキャンパス	22	火	⑭
23	金	⑥	23	月	勤労感謝の日	23	水	年内講義終了
24	土	⑦	24	火	⑩	24	木	天皇誕生日
25	日		25	水	⑩	25	金	文化の日 (11/3) の振替休日
26	月	⑦	26	木	⑩	26	土	事務局休暇開始
27	火	国民の休日 (9/22) の振替休日	27	金	⑩	27	日	
28	水	秋分の日 (9/23) の振替休日	28	土	⑩	28	月	
29	木	⑥	29	日		29	火	
30	金	⑦	30	月	⑪	30	水	
31	土	⑧				31	木	
1 月			2 月			3 月		
1	金	元旦	1	月		1	火	
2	土		2	火		2	水	
3	日		3	水	一般入試 A	3	木	
4	月		4	木	一般入試 A	4	金	
5	火		5	金		5	土	
6	水	⑭ 講義開始	6	土		6	日	AO入試Ⅴ期一般入試 C
7	木	⑭ 御忌会 (2 限)	7	日		7	月	
8	金	⑭	8	月		8	火	
9	土	⑭	9	火		9	水	
10	日		10	水		10	木	
11	月	成人の日	11	木	建国記念の日	11	金	
12	火	⑮	12	金	成績発表 (Sナビ)	12	土	
13	水	⑮	13	土		13	日	
14	木	⑮	14	日		14	月	
15	金	⑮	15	月	追試験	15	火	
16	土	⑮	16	火	追試験	16	水	
17	日		17	水	追試験	17	木	
18	月	⑮	18	木		18	金	
19	火	⑯ 試験・補講	19	金		19	土	
20	水	⑯ 試験・補講	20	土		20	日	春分の日 第9回オープンキャンパス
21	木	⑯ 試験・補講	21	日	一般入試 B	21	月	春分の日 (振替休日)
22	金	⑯ 試験・補講	22	月		22	火	
23	土	⑯ 試験・補講	23	火		23	水	
24	日		24	水		24	木	
25	月	⑯ 試験・補講	25	木		25	金	
26	火		26	金		26	土	全教員会
27	水		27	土		27	日	
28	木		28	日		28	月	2年生オリエンテーション
29	金		29	月		29	火	
30	土					30	水	
31	日					31	木	

平成27年度 人文学部 レビュー

1. 平成27年度 振り返り

●東京キャンパスの取組み、成果

(1) 学生募集（取組み、成果）

学生募集に関しては、アドミッション職員の高校訪問、教員による出前授業、オープンキャンパスでの大学説明・模擬授業・個別面談などを積極的行なった結果、募集定員を上回る入学者を確保することが出来た。ただオープンキャンパス参加の学生数が前年比で減少していたので、これを増加させるのが来年度の課題となった。

(2) キャリア支援（取組み、成果）

キャリア支援委員会に表現学科・歴史学科の両学科長が委員として参加し、歴史学科長が委員長として強力な指導力を発揮した。高校サイドから出口がわかりづらいなど指摘があったので、それを踏まえて「淑徳大学人文学部 キャリア支援ガイド」を作成して、1年次から4年次までのキャリア支援を具体的に説明することが出来るようになった。

(3) 正課活動（取組み、成果）

表現学科では1年次に創作表現技法（演技）の授業で学んだ成果を、最終週に学生が数班にわかれて脚本執筆・演出・音楽・演技などを集団で行なった。歴史学科では、史料の実物を使用して史料解説を行ったり、本物の土器を使用して採寸・模写を行なって、本物の史資料に触れることの重要性を学ぶことが出来た。

(4) 正課外活動（取組み、成果）

両学科共に外部でのフィールドワークを実施した。その際に事前学習・事後学習を徹底的に行なったので、たんにそこに行ってみ学するだけでなく、その背景にある多くのことを学ぶことが出来た。また学生に対して見学する場所によっては、スーツ着用を義務付けたので、一般常識も身につけることが出来た。

2. 次年度への課題、方策

- ・就職にむけての指導・支援が最大の課題となってくる。歴史学科の教員・学芸員希望者、表現学科のアナウンサー・声優希望者をどのようにしたら、その職に就けさせることが出来るか。そのためには教職専門の予備校などから講師を向かえて、集中語義を実施するなどの方策が重要になってくる。
- ・学生募集に関しては、定員確保はそれほど難しい問題ではないと思うが、そのためにはオープンキャンパス参加学生数の増加が一つの課題となってくる。

以上

1 学生の受け入れ①〔募集・入試〕

関連委員会	募集・入試委員会
関連部署	東京アドミッションセンター
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

一般入試・センター利用入試において、歴史学科、表現学科ともに志願者倍率を3.0倍まで上げる。また、今まで以上に学力レベルの高い受験層を増やす。(偏差値50以上)

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

東京アドミッションセンターとして、人文学部の入学定員の確保と適切な入学試験の実施に努める。

(2) 目的

- ① 人文学部の入学定員を確保するため、出願者・オープンキャンパス参加者数の目標値を以下のように設定し、実現を目指す。

【目標値】

学 科	入学定員	出願者	オープンキャンパス参加者
歴史学科	40	320	700
表現学科	60	480	

- ② 受験生に対して人文学部の「アドミッションポリシー」を十分に理解してもらい、入学後のミスマッチを防ぐ。また、学修目的を明確にもった受験生を増やす。
- ③ 入試試験方式ごとに厳正な試験を実施し、受験生はもとより高等学校にも十分ご理解いただく。

2 具体的計画

PLAN

(1) 入学定員の確保

歴史学科40名、表現学科60名、学部定員100名の確保。併せて学力レベルの高い受験者層の獲得を図り、学部の偏差値を上げる。(目標値：50以上)

(2) オープンキャンパスの適切な運営と実施内容の充実

盛況感を出すために短期大学部と同日開催とするが、来校者が必要な情報を収集できるよう導線づくりを徹底する。また、専任教員による体験型の模擬授業の充実を図り、学部・学科・コースの学びをしっかりと来校者に伝える。

(3) 募集効果のある広報媒体の選定と実施

適切な広告費の支出を行う。広報時期、媒体の種類、対象等を考慮しながら、与えたい情報が与えたい対象に届く広報展開を実施する。また、単年度の募集効果を見込むものだけではなく、次年度につながる広報展開も視野に入れる。広報媒体の効果測定は、資料請求数の増減ではなく、資料請求から出願までどのくらいの割合でつながっているかで行う。

(4) 適切な入試運営

危機管理体制を明確にし、円滑な入学試験実施体制を構築する。

3 取組状況

DO

取組状況は下記の通りとなっており、期中に文部科学省より出された、入学定員厳格化の影響もあったが定員確保は昨年と同様に達成をした。

しかしながら、目標の出願者数とオープンキャンパス参加者数には届かなかった。オープンキャンパス参加者の数が減ったことにより、AO入試・推薦入試層の受験者数が減少したと考える。

一方で、一般・センター利用入試の志願者数は確保できたため、昨年と同様にベネッセの模試の結果で、偏差値が50となり一定の実績が見込めた。

【目標値】

学 科	入学定員	出願者	オープンキャンパス参加者
歴史学科	40	299	682
表現学科	60	311	

4 点検・評価

CHECK

(1) 入試

歴史学科、表現学科ともに一般入試、センター利用入試では、出願者数は、ほぼ昨年と同数であった。しかし、下記に記載させていただいた歩留率の通り、本学部を第一志望とする受験者層が多くなったといえる。偏差値が上がったことなど、色々な要因が考えられるが、選ばれる学部になりつつあり、良い傾向と考える。

	一般			センター利用		
歴史学科	年度	手続／合格	歩留率	年度	手続／合格	歩留率
	H27	16／53	30%	H27	1／46	2%
	H28	12／41	29%	H28	3／31	10%

	一般			センター利用		
表現学科	年度	手続／合格	歩留率	年度	手続／合格	歩留率
	H27	18／40	45%	H27	4／28	14%
	H28	13／36	36%	H28	8／27	30%

5 次年度に向けた課題

ACTION

入学定員の厳格化に伴い、上位大学の受験層が3月入試で出願してくる可能性が増えてくるため、3月入試まで正規合格者が出せるように入学定員の管理を徹底する。

以上

1 学生の受け入れ②〔在籍管理〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

平成26年度に開設した学部のため、新入生124名でスタートした。在学生が他の学部より少ないため、きめ細やかな学生指導が展開できたと考えている。

開設2年目となるので、在学生数も倍になる。初年度と同様にアドバイザー（1クラスに2名を配置）を中心に学生指導を行い退学者0を目指す。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

アドバイザーが、学生一人ひとりの必要に応じた相談や指導を行うことで、学習意欲の低下を防止し退学者を出さないようにする。さらに、学生支援部と学生に関する情報を共有化し指導を強化する。

(2) 目標

少人数の特性を活かし、きめ細やかな学生指導を行い、退学者を出さないようにする。

2 具体的計画

PLAN

各学期初めの5週目までに出席状況調査を行い、欠席の多い学生に面接指導する。

GPA制度に基づいた学習指導を実施する

学内において学生の情報共有化を図る。

3 取組状況

DO

各学期初めに開講する全科目の出席状況調査を行い、欠席の多い学生に、アドバイザーによる面接指導を行った。

GPA制度による、成績不振学生に対する面接指導を実施した。

対象者 歴史学科：今期1.0未満学生1名（1年）

表現学科：今期1.0未満学生1名（1年）

表現学科：2期連続1.0未満学生1名（2年）

上記3名は平成28年度在籍中

4 点検・評価

CHECK

退学者の内訳

平成26年度の退学者	歴史学科1年	0名	表現学科1年	1名
平成27年度の退学者	歴史学科1年	4名	表現学科1年	0名
	2年	0名	2年	2名

退学事由

平成26年度	
進路変更（就職）	1名
平成27年度	
進路変更（就職）	4名
就学意欲の低下	1名
体調不良のため	1名

入試別退学者状況

AO I 期	1 名
AO II 期	2 名
AO III 期	2 名
一般A	1 名

平成27年度の退学者は、1年4名、2年2名となった。入試種別からAO入試の割合が高く、また、退学事由も進路変更（就職）が多かった。

AO入試で入学した学生の進路変更による退学が多いことから、AO入試での進学者には、入学後の面接指導を徹底し退学者を出さない工夫が必要になると考える。

5 次年度に向けた課題

ACTION

人文学部の入学定員は両学科で100名と少人数の為、退学率に換算すると必然的に率が高くなる。このことから、如何に退学者を出さないかの工夫が必要となる。

定員充足率の厳格化が示される中、退学者0名にするため教学一体となり、入学者数イコール卒業者数とするべく、学生支援体制を強化する。

以上

2 教育課程①〔歴史学科〕

関連委員会	教学委員会・教育向上委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 歴史学科がアクティブラーニングの一環として取り組んできたフィールドワークを、より組織的に深化拡充していくために、振り返りの意味を込めて、実践内容をまとめ分析を加えた論文を作成し、高等教育研究開発センターの年報に発表し、内外に問う必要がある。
- ② フィールドワークを教員主体で運営してきたが、次年度からは学生が主体的に取り組むことができるような体制作りを行う必要がある。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・活動方針

- (1) 専門分野における基礎的知識を体系的に理解させるために、歴史学を構成する主要分野に関する基礎的な知識を教授する教育課程の編成を行う。
- (2) 各専門分野に結び付く幅広い内容や専門的技能を修得させる。
- (3) 理論的知識や能力を実務に応用できるような能力を開発する。
- (4) 歴史学の学問体系の理解の基に、歴史学分野に関する基本的な知識を体系的に理解した上で、歴史学の理論と方法の関係について理解し、これらを総合的に実践する能力を身につけさせる。

・目標

- (1) 前期において、授業科目全体の50%以上でアクティブラーニングを導入する。
- (2) 前期において、学生がより主体的に取り組むことができるようにアクティブラーニングの形態に一層の工夫を加える。
- (3) 後期の段階で、コモンルーブリックの導入を促進すると共に学部学科独自のルーブリック作成を目指す。
- (4) 後期の段階で、地域貢献を視野に入れ、歴史学科の独自性を活かした教室外プログラムを開発する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 前期の段階で、アクティブラーニングの効果的な活用方法を学科内で検討し、学生が参加できる環境をととのえる。
- (2) 前期の段階で、歴史学科のフィールドワークの評価の方法について、他大学の事例なども参照しながら、本学の独自性を考えるため学科内で検討を行う。
- (3) 後期の段階で各科目において魅力的なフィールドワークのプログラムを開発する。
- (4) 後期の段階で、アクティブラーニングをより組織的に深化拡充していくために、実践内容をまとめ分析を加えた論文等を作成し、内外に情報発信していく。

3 取組状況

DO

- (1) 歴史学科の専門科目のうち、専任教員の科目の50%以上にアクティブラーニング型の授業を行う旨の記述を行った。
- (2) 前期において歴史調査実習などの科目においてフィールドワークと学生主体の発表を実施しアクティブラーニングの深化を図った。
- (3) 後期においてコモンルーブリックの導入を促進し、学科独自のルーブリックを作成した。
- (4) 後期において地域貢献を視野に入れ、歴史学科独自の教室外プログラムを開発した。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 専任教員の授業科目のほとんどにおいて、ディスカッションなど双方向の授業が実施された。
- (2) 学生が主体的に参加する形の授業形態にするという当初の目標も概ね達成された。
- (3) 既存のコモンループリックを歴史学科の独自性を踏まえカスタマイズできた。
- (4) 「拓本で遊ぼう」など歴史学科で作成した独自の教室外プログラムを近隣の小学校の児童や埼玉県八潮市の小学校の児童に対して実践することができ、好評であったことは特筆すべき点である。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 科目の状況に応じた多様なアクティブラーニングの内容をシラバスで言及する必要がある。
- (2) アクティブラーニングにおいて学生主導の形をさらに進める必要がある。
- (3) 各科目の到達目標を確認し、カスタマイズされたループリックがこれに合致しているかどうか、確認する必要がある。
- (4) 地域貢献を視野に入れた教室外プログラムの開発にあたっては、学生だけではなく自治体や地域住民との連携・協働が必要である。

以上

2 教育課程②〔表現学科〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 演劇やグループワーク、学外授業など、アクティブラーニングや協働学習を積極的に取り入れるものの、学生の学習意欲によって学びの差が大きい。主体的な学びを引き出すためのルーブリックの活用、事前・事後学習の徹底を図りたい。
- ② 社会に出て活躍できる人材を育成するため、基礎学力の引き上げに引き続き取り組む。
- ③ 一般教養と専門課程の知識の関連について、折に触れて語りかけると同時に、授業で体感できるような関連づけに取り組みたい。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

変化の激しい時代を生き抜くには、自分の考えを持ち、自分の言葉で伝え、周りを巻き込みながら実行する力が欠かせない。この中核となる「伝える力」を育むことを柱とし、教育の体系化に取り組む。特に28年度においては、社会で役立つ「実学」としての「伝える力」を育むことに力を注ぐ。

(2) 目標

学生の「伝える力」を育み、社会で活躍する人材を育てる。インターネット環境が大きく変わるなか、社会で求められる表現力もまた変化している。デジタル時代の表現手法を身に付けると同時に、時代の変化を超える普遍的な表現力を磨くことを目指す。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 1年次の導入教育として、「演劇」と「文章表現」を徹底的に学ぶことで、表現の基礎力ならびに協働学習の基礎を身に付ける。
- (2) 授業内において、グループワークやペアワークなど、アクティブラーニングを積極的に取り入れる。特に2年次の専門科目においては、地方自治体や企業と組んでのプロジェクト・ラーニングに取り組む。
- (3) 2年次の専門課程においては、個人もしくはグループワークによる課題制作を多く取り入れる。

3 取組状況

DO

- (1) 演劇の授業を通年で週2コマ行った。前期終了時、後期終了時にそれぞれ成果発表の場を設けた。特に後期発表会は、アリーナにおいて渡辺徹客員教授、また父兄や他学部の教員や職員などの観客の前で成果を発表した。文章表現もまた、エッセイ集などの成果物をまとめた。
- (2) ほぼすべての授業において、アクティブラーニングを取り入れた。また包括連携協定を結ぶ板橋区と連携し、発行部数20万部の板橋区報でコラムの取材執筆を行うプロジェクト・ラーニング(PBL)を行った。また企業と組んで広告制作などに取り組むPBLも実施した。その他、池袋駅構内の広告について、専門家から現地で講義を受ける学外授業も行った。
- (3) 授業での学びをもとに、板橋区やときわ台に関する番組の制作、またコラムや小説の執筆、ホームページの制作などに取り組んだ。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 一年次の演劇の授業においては、さまざまな困難を乗り越えて、皆でひとつの作品を作り上げる協働作業の力が育まれた。またオリジナル脚本を書き上げ、ひとつの演劇作品を作り上げるなど創作の基礎が身についた。文章表現においては、個人でひとつの作品を完成させる力をつけた。
- (2) 二年次の板橋区と連携してのPBLにおいては、取材・執筆のむずかしさと自身の課題に気づく学習の機会ともなった。また企業と組んでのPBLでは、実際に企業が抱える問題を提示され、それをいかに解決するか、広告制作物につなげるかという難易度の高い課題に取り組んだことで、学生に論理的思考力、課題解決力などが育まれた。
- (3) 期限内にひとつの作品を作り上げることで、学生の学習意欲が高まり、達成感が得られたようだ。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 演劇の授業においては、演劇発表後に学びを定着させるための振り返り、言語化をさらに行う必要がある。発表環境を整えることにも、事務局と連携して取り組みたい。
- (2) アクティブラーニング、特にPBLにおいては、効果的な学びにつなげる授業の設計に課題が残る。理論と演習をいかに連携させるか、さらなる体系化が必要である。
- (3) 課題の難易度の設定、成果物の発表方法、成果に対するフィードバックなどを検討する必要がある。

以上

3 教育組織①〔歴史学科〕

関連委員会	教学委員会・人事委員会
関連部署	総務部・学生支援部
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 学生の修学意欲などを踏まえ、専任教員で対応できない分野を兼任講師の教員でカバーする必要がある。そのためには専任教員と兼任講師との綿密な打ち合わせが必要であり、学科長の一層のマネジメント能力の向上が求められる。
- ② 歴史学科の教育体系を絶えず見直ししながら、中・長期的視点に立って、完成年度以降に補充すべき分野の教員配置について検討を開始する必要がある。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・活動方針

- (1) 必要に応じて、専任教員と兼任講師との打合せを実施する
- (2) 歴史学科の教育体系を中長期的視点に立って見直す。

・目標

- (1) 専任教員と兼任講師の間で、授業で抱えている問題点や事前事後学習の進め方などについて協議する。
- (2) 平成27年度末までに完成年度以降のカリキュラム再編に向けて問題点の抽出を行う。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 全教員会において、専任教員と兼任講師との間で、事前事後指導の実施状況など具体的な課題について協議する。
- (2) 後期の段階において、歴史学科の現行のカリキュラムの問題点を抽出するためのミーティングを実施する。

3 取組状況

DO

歴史研究の基礎となる科目を充実させる必要性を確認した。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 専任教員と兼任講師との打合せについては、全教員会だけでは限界があり、もっと日常的にあらゆる機会を利用して実施する必要がある。
- (2) カリキュラムの再編については、アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーと連動しており、3つのポリシーとの関わりで、現行カリキュラムを検証し、カリキュラムの見直しをかけていかななくてはならない。この点がいまだ不十分である。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) カリキュラムの再編や3つのポリシーの見直しを行う前提として、本学歴史学科の独自性を一言で言うと、どのようなものとなるのか、本学歴史学科の目指す方向性を明らかにする。
- (2) (1)の作業を前提として、カリキュラムに再編案を作成し、その上で、歴史学科を構成する専任教員の専門分野を見直し、不足している分野にどのような形で対応していくべきか。この点について学科としてのプランを提示する。

以上

3 教育組織②〔表現学科〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成 26 年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 表現力の向上、その基盤となる日本語能力の底上げのために、担当科目を超えて連携して指導を行う必要がある。そのための連携を図る。
- ② 表現学科ならでのアクティブラーニングをさらに開発して、教員間での情報共有を図る。
- ③ 一期生、二期生と学生数が増えるなかで、細やかな学生指導に割ける時間が限られてくる。学生の出欠状況を随時確認するなど、情報データベースも活用しながら、より効果的な指導法を探る。問題の芽を早めに摘む方法を探っていく。
- ④ 担当教員の決まっていない専門科目について、適任の教員を探すことが喫緊の課題である。計画的に、早めの選考を心がける。

1 平成 27 年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

学部開設 2 年目を迎え、専門課程の授業が増えるなか、各分野における教育上、研究上優れた知識・経験を持つ教員を配置する。専任教員はすべての表現において基礎となる国語力、ならびに基礎学力の向上につながる指導を行う。表現学科ならではのアクティブラーニングが実施できる体制を整える。

(2) 目標

一般教養、ならびに表現学科の専門課程において、専門的な知識を有する教員を配置する。特に専門課程においては、表現分野において実務経験豊富な教員を置く。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 専任教員の人的ネットワークを生かして、専門課目を担当するにふさわしい教員を探す。
- (2) 表現学科ならではのアクティブラーニングの手法を開発するにあたっては、学外の研究会などの情報も持ち寄り、教員間で共有する。
- (3) 専任教員の間で、学生の学修態度、基礎的学力などに関する情報を共有する。

3 取組状況

DO

- (1) 学部開設から 2 年目を迎え、社会で役立つ実学を意識しながら、不足する専門分野の教員に授業を依頼した。
- (2) 各教員がアクティブラーニングの手法を開発実践、その情報を共有した。
- (3) 学科会において、学生の学力に関する情報共有を行った。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 専門課程においては実務経験豊富な多彩な兼任講師を迎えることができた。
- (2) アクティブラーニングの教育体制については、外部との連携方法など少しずつノウハウが蓄積されてきた。これをいかに教員間で共有するか、また毎回異なる課題が発生することに対応するか、さらなる仕組み化が必要である。
- (3) 学科内での情報共有は一定程度行われたが、さらなる連携が必要である。

- (1) 表現分野で現在も活躍する実務家の兼任講師の場合、仕事の都合で継続が難しい場合もある。
早めに教員の配置計画を進める必要がある。
- (2) いよいよ就職活動が始まる。学生の社会人基礎学力向上に向けて、完成年度に向けて、教員間のさらなる連携が必要である。

以上

4 学 生 支 援

関連委員会	教学委員会
関 連 部 署	学生支援部
関連データ	

平成 26 年度大学年報

【次年度に向けた課題】

人文学部の完成年度までに毎年段階的に在籍学生数が増加するため、東京キャンパス全体で計画的に学生支援体制を整えていく。

1 平成 27 年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

- (1) 学生が健全で有意義な学生生活を送れるよう、学習の推奨及び学生生活の支援を行う。
- (2) 短期大学部に蓄積している学生支援の知見をいかしながら、人文学部の教育目標に鑑みた学生支援体制を整える。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 入学前教育の実施
- (2) 奨学金給付者の適正な選考
- (3) サークル、学生諸団体の活動支援
- (4) 淑徳祭の運営実施の支援

3 取組状況

DO

- (1) 入学前教育の実施について
 - ・合格者向けの入学前教育として、課題図書感想文提出、新聞ノート作成を実施。
 - ・入学前セミナーとして、大学での学び、大学生活、学科別セミナーを実施。
- (2) 新入生セミナーの実施について
 - ・新入生向けの導入教育として、建学の精神を理解し、教職員及び学生相互の親睦と交流をはかるために実施した。本年度は、歴史学科 1 年生 49 名、表現学科 1 年生 75 名の合計 124 名が参加し、2 年生からピア・カウンセラーとして 6 名が同行した。セミナー内のプログラムは、2 年生の学生がセミナー実施前に複数回の打ち合わせを重ねながらレクレーション等を企画・立案し、新入生からの評価も概ね満足度が高かったと感じ取れた。
- (3) 奨学金給付者の適正な選考について
 - ・各奨学金給付者は、GPA、経済的状況等を基に、学部長、学科長、教学委員会によって選考を行った。

(内訳)

淑徳大学一般給付金	13 名	(歴史学科 6 名、表現学科 7 名)
淑徳大学貸与奨学金	0 名	(歴史学科 0 名、表現学科 0 名)
GPA 成績上位者	前学期 6 名	(歴史学科 2 名、表現学科 4 名)
	後学期 7 名	(歴史学科 2 名、表現学科 5 名 (内 2 名は同率順位))
GAP 成績向上者	前学期 2 名	(歴史学科 1 名 表現学科 1 名)
	後学期 3 名	(歴史学科 1 名 表現学科 2 名)
- (4) サークル、学生諸団体の活動支援について
 - ・学生向けにサークル立ち上げ時の助言と支援を行った。

(登録サークル数) 28 団体 (継続 17 新規 11) 2015. 11. 18 現在
- (5) 淑徳祭の運営実施の支援について
 - ・短期大学部との合同開催で実施。淑徳祭実行委員を集い、本年度は、歴史学科 2 年生が実行

委員長となり、短期大学部の学生と共同で運営を行った。1年生は、歴史学科および表現学科の5クラス全部が企画に参加した。また、サークル活動の発表の場として、パネルの展示、作品発表会、映画上映など7団体の発表や展示が行われた。各クラス、サークルは嗜好を凝らした参加となり、人文学部らしさが感じ取れた。

4 点検・評価

CHECK

(1) 入学前教育の実施について

入学前教育

ア. 課題図書の提出状況（対象：当該年度の年内に実施した入試における入学手続き完了者）

提出対象者 64名 提出者 62名

イ. 入学前セミナー参加状況（対象：セミナー実施日までの入学手続き完了者他）

対象者 105名 参加者 87名

ウ. 英語試験（対象：入学手続き完了者）

対象者 106名 受験者 92名

上記以外に、入学手続き完了者に新聞学習を課している。

課題図書、新聞課題に関しては、大学の学修に必要な活字を読む習慣を身に付けることを目的とし、英語試験は、高校までの英語の習熟度を測ることを目的としている。

人文学部で実施している入学前教育は同様の内容で3年間継続的に実施している。課題提出、セミナー参加率も決して低くはないが、全員が提出、参加できるような仕組の検討が望まれる。また、今後の入学前教育については、内容、目的、成果など検証のPDCAサイクルで検討し、人文学部の学部教育に結びつく入学前教育に発展させることが望まれる。

(2) 奨学金給付者の適正な選考について

- ・選考においてとくに問題なし。

(3) サークル、学生諸団体の活動支援について

- ・学部開設の初年度から多くのサークルが立ち上がり、学生も活発に活動していた。
- ・東京キャンパスは運動施設や設備が限られるため、一部の学生は他キャンパスの部活動等に参加している場合もある。
- ・サークルの活動スペースが限られており、現在はフリースペースや編集室（PCを設置）を使用している場合が多い。人文学部の完成年度までにはこれらのスペースが授業で埋まる時間が多くなるため、活動時間の調整が必要になると考えられる。

(4) 淑徳祭の運営実施の支援について

- ・学部開設の2年目で、学生の実行委員の経験不足から円滑な運営とまでは行かなかったが、昨年と比較すると格段の進歩が散見できた。今後は、早期に学生が主体的に組織化し、平成27年の運営内容を検討して、平成28年度実施に向け準備をするように指導していきたい。

5 次年度に向けた課題

ACTION

人文学部の完成年度までに毎年段階的に在籍学生数が増加するため、東京キャンパス全体で計画的に学生支援体制を整えていく。

以上

5 就 業 支 援

関連委員会	キャリア支援委員会
関 連 部 署	キャリア支援室
関連データ	

平成 26 年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 内外からの情報を収集し、必要に応じて効果的な戦略を追加・調整していく。
- ② キャリア支援室と教員とが連携し、情報を共有しながら就業支援を進めていく体制を整える。
- ③ 歴史学科・表現学科それぞれの学科において、専門性を活かした職業への採用への方策を探る。

1 平成 27 年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・活動方針

- (1) 平成 29 年度卒業生就職率 90% 以上を達成するために、低学年から積極的にキャリア支援を行い、学生の強みを把握し伸ばすことと、弱みを把握し底上げを行う。
- (2) 学生の個性を尊重しつつ、学校と家庭そして本人が納得感を持ったキャリア選択ができるようにする。
- (3) 就職することが極端に狭き門である職業への現実理解の促進を行う。現実を理解することで、学生のモチベーションがさらに上がるよう支援する。

・目標

- (1) 学部カリキュラムにない「一般常識」の向上
就職活動時の第一関門である筆記試験等が通過できるよう、低学年から一般的な知識レベルを測定（筆記試験、作文試験、面接等）し、弱みを克服できるよう支援する。
- (2) 低学年からのキャリア支援
1 年次から「キャリアについて考える場」を提供する。
2 年次においては、自分理解を深める場の提供と同時に世の中にある様々な職種理解を深める場を提供する。
就職活動が本格化する 3 年次生向けキャリア支援プログラムを次年度に実現可能なものとする。
- (3) 学生が業界や仕事内容について理解を深める機会を提供する。
- (4) 学部、各学科の強みを共有する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 学部カリキュラムにない就職活動時に行われる筆記試験用「一般常識」の向上
 - ア 全ての学年で実施するキャリア支援ガイダンス時に、複数回一般常識テストを実施。学生の弱点を把握することと、それが克服できるよう対策を講じる。
 - イ 一般的な知識レベル（一般常識）の向上を目指し、SPI 対策講座、公務員試験対策講座を開講。次年度以降も継続開講することで、学習する機会を多く提供する。
- (2) 低学年からのキャリア支援
 - ア 1 年次キャリア支援ガイダンスを実施し、両学科 1 年次クラスアワー教員と協働で、学生全員参加を目標とする。
 - イ 2 年次キャリア支援ガイダンス「自己分析」「職種研究」の並行理解を深める。
特に職種については、学生一人ひとりが様々な可能性を秘めていることと、広い視野が持てるよう育成する。
 - ウ 就職することが極端に狭き門である職業への職業理解の促進を行う。特にそれらの仕事

に就くための準備を理解することで、早期から、学生のモチベーションがさらに上がるよう支援する。同時に、第一希望の進路に進むことができない可能性も少なくないため、それに代わる進路選択方法等の情報提供を行う。

エ 他学部キャリア支援関連部署との協働により、キャンパスを越えた講座・行事等の参加が可能となるよう調整を行う。実現可能となった場合は、学生に参加勧奨する。

(3) 各学科の強みの共有

ア 専任教員が担当するすべての授業において、各学科の強み等を学生に伝えることが出来るよう、学科会議内で情報共有する。

イ 専任教員は、担当授業内で本学、本学部、各学科の強みを学生に理解させることにより、学生一人ひとりの自己肯定感を上げていく。

3 取組状況

DO

(1) 1年次キャリア支援ガイダンスを実施し、1年生からの進路選択の重要性を認識させる機会を設けた。

(2) 2年次キャリア支援ガイダンスを実施し、「自己分析」「職種研究」に関わるプログラムを用意した。

(3) 東京キャンパス独自のキャリア支援に関わるパンフレットを作成した。

4 点検・評価

CHECK

(1) 1年次、2年次ともにキャリア支援ガイダンスの出席率が50%未満にとどまった。

(2) 学生に学科で学んだことを直接活かすことができる業界や仕事内容をどれだけ体験させることができた。

(3) 学科の教育を活かすことができる可能性のある職業について、学生に十分な指導はできなかった。

5 次年度に向けた課題

ACTION

(1) キャリア支援ガイダンスの出席率をあげる。

(2) キャリア支援ガイダンスの内容を精査し、学生の意欲に応えることができるように改善すべき点を改善する。

(3) 基礎学力の充実のためにSPIに関わるカリキュラムを用意する。

(4) 教員・学芸員・マスコミ志望の学生に対し、難関であることを認識させた上で、進路選択に対して広い視野で取り組むことができるように指導する。

(5) 教員・学芸員・マスコミなどの分野に対して、少しでも可能性のある学生については、学科とキャリア支援室・支援委員会が一体となって指導する。

(6) 埼玉キャンパス、千葉キャンパスにおけるキャリア支援の取り組みに学びながら、東京キャンパスならではの、キャリア支援の進め方を確立する。

以上

6 研究活動

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	総務部、教育研究支援センター
関連データ	

平成 26 年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 引き続き博士号未取得者に対する学位請求論文執筆のための支援を行う。
- ② 学研究費を始めとする外部資金調達、及び各種研究助成金の公募に積極的に応募することを学科会などの場において奨励していく。
- ③ 学科会など学科教員が一堂に会する場において研究発表等を積極的に行う機会を設ける。
- ④ 学会や研究会において教員が積極的に発表できるような環境作りのためのマネージメントを学科長は行う必要がある。

1 平成 27 年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・方針

- (1) 外部資金獲得を念頭に置いた研究を企画立案する。
- (2) 個々の教員が、教育活動に連動した研究目標を設定し研究業績を蓄積する。

・目標

- (1) 学科教員全員が大学学術研究助成、学術奨励研究助成、科学研究費補助金申請などに積極的に応募する。
- (2) 学科教員全員が、何らかの形でそれぞれの専門分野に関わる著書、論文、学会における口頭発表を行う。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 学科長は、個々の教員と 1 年に 2 回以上、面談を実施し研究の進捗状況を把握する。
- (2) 学科長は、学科会において、毎回、個々の教員の研究の進捗状況を報告させる。

3 取組状況

DO

- (1) 専任教員 14 名の教員のうち、7 名が科学研究費補助金の申請を行った。
- (2) 今年度、新たに 2 名の科学研究費補助金申請が採択された。
- (3) 今年度、本学の学術研究助成に歴史学科の 2 名の教員が応募し採択された。
- (4) 遠藤ゆり子准教授が、吉川弘文館より単著『戦国時代の南奥羽社会』、編著『伊達氏と戦国争乱』を刊行した。
- (5) この他、土井進教授、森田喜久男教授、三宅俊彦教授、田中洋平助教、北野大教授、野村浩子教授、白寄まゆみ教授、杉原麻美准教授が学術論文を発表した。

4 点検・評価

CHECK

科学研究費補助金申請の採択率をさらにあげるために、各教員はさらに研鑽を重ね、学会誌、紀要への投稿を今後も積極的に行う必要がある。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 博士号未取得者に対し、博士号が取得できるように環境整備を含めた支援を行う。
- (2) 学科会などにおいて適宜、個々の教員に研究の中間報告をさせる。
- (3) 教育や学内行政とバランスをとりながら、学科内において個々の教員がコンスタントに研究発表できるような環境作りを行う。

7 社会貢献

関連委員会	教学委員会、教職運営委員会、ボランティア委員会
関連部署	学生支援部、ボランティアセンター
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- ① 地域貢献をさらに進める。その際に貢献したという事実を羅列するだけでなく、そうすることがどのような意味で教育研究活動に資するものであったのか、この点を絶えず考えながら情報発信を行う。
- ② 地域貢献の対象を板橋区だけに限定せず、本学においていまだ連携が不十分な自治体へ積極に進出していく。
- ③ 板橋区の文化財に関わる調査研究活動の還元の仕方について、ただ単に研究成果のみを情報発信するのではなく、地域研究の途中であっても地域住民と共にできることはないか、さまざまな可能性を探る。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 活動方針

本学と包括連携を結んでいる板橋区はもちろんのこと、これにとどまらず他の自治体の教育委員会や生涯学習施設との連携を図る。

(2) 目標

関係諸機関と協議しながら、教育研究活動を通して、地域の歴史文化を再発見し、地域の活性化につなげていく。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 板橋区また板橋区教育委員会の他、埼玉県八潮市教育委員会とも協議し、それぞれの地域の文化財を活かした教育研究活動を推進する。
- (2) 板橋区教育委員会と協議しながら、板橋区内に学生の学習支援ボランティアを派遣する。

3 取組状況

DO

- (1) 東京キャンパス近隣の小学校の児童を招待し、「拓本で遊ぼう」という体験型授業を学生主導で実施した。
- (2) 八潮市の児童が東京キャンパスを訪問し、学生自らが講師となって、体験授業を実施した。
- (3) 板橋区内の小学校・中学校・高等学校に学生の学習支援ボランティアを派遣した。
- (4) 板橋区の広報セクションと連携し、板橋区報「広報いたばし」のコラムを学生が取材・執筆した。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 歴史学科が中心となって行われた「拓本で遊ぼう」などの体験型授業は、板橋区教育委員会において、必ずしも情報として共有されていないので、今後は連携を密にしていきたい。
- (2) 板橋区内の小中高への学習支援ボランティアについても、教職担当教員の熱意にも関わらず、板橋区において、実績として十分に認知されていないので、今後は窓口をどうするのか、こういった点について組織体制の再検討が必要である。
- (3) 「広報いたばし」の学生コラムは、発行部数20万部の新春特別号に掲載されたこともあり、反響が大きかった。学生にとって大きな学びの機会となった。今後は学生が主体的に地域活動にかかわることが求められる。

- (1) 自治体との連携を行う前提として、東京キャンパスにおける窓口を一本化する必要がある。
- (2) 社会貢献にあたっては、我々は何ができるか、何をしたいのかという観点だけでなく、地域住民や自治体が大学に求めていることは何か、こういった点を念頭に置いて活動を展開していく必要がある。

以上

8 図書館〔東京〕

関連委員会	東京図書館運営委員会
関連部署	図書館事務室
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 短期大学のみの時に比べ、人文学部の設置により図書館利用者数及び図書の貸し出し冊数が多少は増加してはいるが、まだまだ不十分であり次年度は学生の図書館利用の増加を最優先の目標として進める。
- 具体的には
- (ア) 読書感想文発表会の開催
一定の冊数の図書を借り出し、それぞれの図書について感想文を提出した学生に淑徳祭で発表の機会を与え、表彰する。
 - (イ) シラバスに記載の参考図書を可能なら複数冊用意し、学生が利用しやすいように参考図書コーナーを設け、そこに一括して配架する。
 - (ウ) 全教員会において教員に図書館利用の推進のため、図書館での授業、特に視聴覚資料の使用時など、および参考図書について感想文を書かせるなどの配慮をおねがいする。
 - (エ) 図書館利用の促進の目的の一つとして、従来は主として選書作業をしていただいた図書選書委員に対し、二つのグループに分けて活動を行なってもらう。具体的には図書館の発行する「揺鈴」の編集及び読書感想文発表会の運営および学生からの図書館の中での企画展示などのアイディアを実際の活動に移す。
 - (オ) 学部設置後1年を経過したので、次年度は新たに購入雑誌の見直し、視聴覚教材の充実にも力を注ぐ。
 - (カ) 図書館から離れている4、5号館からも可能なら蔵書の検索ができるようにしていきたい。
 - (キ) 図書館をただ単に図書の閲覧、視聴覚教材の鑑賞の場所にとどまらず、自宅にパソコンを持たない学生に対しパソコンのみを利用しに図書館に来ることも可能であるようにしたい。
 - (ク) 淑徳大学の3つの図書館の連携、具体的には所蔵図書の相互貸出しなど、および各図書館の特色化を図るため、3図書館の館長会議を継続的に開催する。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

活動方針

- (1) 学生及び教職員の学習及び教育、研究支援を行う図書館とし、より多くの利用を推進する。
- (2) 学生目線での要望を実現する図書館とする。

活動目標

- (1) 図書館の利用を促進するための種々の企画を立て実施する。
- (2) 従来通り1年生対象の図書館利用ガイダンスを実施する。
- (3) 淑徳大学の3つの図書館の連携

2 具体的計画

PLAN

- (1) 図書館の利用促進
 - ア 読書感想文発表会の開催
 - イ シラバスに記載の参考図書を用意
 - ウ 図書館利用ガイダンスの実施

- エ 図書館での授業、特に視聴覚資料の使用を全教員会で要望
- オ 東京図書館の広報誌「揺鈴」の発行
- カ 学生の図書選書委員の活性化

(2) 淑徳大学3図書館の連携

3 取組状況

DO

(1) 図書館の利用促進

- ア 一定の冊数の図書を借り出し、それぞれの図書について感想文を提出した学生3名に11月の淑徳祭で発表の機会を与え、参加者の投票により表彰した。
- イ シラバスに記載の参考図書コーナーを3階に設け、そこに一括して配架した。
- ウ 人文学部1年生（表現学科3クラス、歴史学科2クラス）の学生を対象に図書館利用ガイダンスを実施した。
- エ 両学科の複数の教員が図書館での授業を実施した。
- オ 平成28年3月に発行した。
- カ 従来は主として選書作業をしていただいた図書選書委員を二つのグループに分けて活動を行なってもらった。
一つは図書館の発行する「揺鈴」の編集及び読書感想文発表会の運営であり、別のグループの学生委員には図書館の活性化のための展示などの企画、アイディアを期待した。

(2) 淑徳大学3図書館の連携

平成28年3月に3図書館長らの出席のもと、会議を開催した。

4 点検・評価

CHECK

- 上記、取組状況の(1)のアからオについては、計画通り実施できた。
しかし、カの項目については不十分であった。
(2)については十分な意見交換ができた。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 次年度も図書館の利用拡大を最大の目標とする。具体的には平成27年度に実施した種々の企画をさらに推進する。特に、読書感想文発表会の参加者を倍増するため、さらに学生に周知徹底を図る。
- (2) より学生に身近な図書館としての存在とするため、学生選書コーナーの充実を図る。
- (3) 学生図書委員による図書館活性化のアイディアをより吸収しやすくするため、定期的に会議を持つ。
- (4) 今後可能であれば、4、5号館からの図書の検索なども考えていきたい。
- (5) 3図書館長の会議では、今後の各図書館の特徴付けを議論していきたい。

以上

9 自己点検・評価

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	総務部、教育研究支援センター
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- 1) 次年度は、学部・学科の教育研究の目的、具体的な到達目標を一人ひとりが把握する段階から、それをいかに日々の教育研究に取り入れていくかを学科、学部全体で話し合い、教育研究水準の向上および、管理運営の健全化を図ることで、学部の目指す方向性の真の意味での共有化を開始する。また、授業科目の位置付けや、他の授業科目との接続関係について、教員の相互理解を図るなど組織的な取組にする。
- 2) 次年度は、さらに内容の充実を図る。
- 3) 次年度の目標を提示し、平成27年度の目標達成に向け、一人ひとりが、PDCAの実施を開始する。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・方針

- (1) 教員各自の研究成果に裏打ちされた教育活動を行なうため、個々の専任教員がそれぞれの研究目標を明確に打ち出して、それに基づいた研究成果を蓄積する。
- (2) 学内の教育・研究費だけでなく、外部資金の積極的な導入を図る。そのためには個々の研究テーマだけでなく、グループによる研究テーマを設定して共同研究活動を推進する。

・目標

- (1) それぞれの研究分野・テーマに応じた研究論文を作成したり、学会報告を行なったりして学内だけでなく、外部にも情報を発信していく。
- (2) 研究活動だけでなく、共同で教材開発・作成を行なう。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 学科会で個々の専任教員の研究の進捗状況を報告して、全員で情報を共有する。
- (2) 学科長は学科教員との個別面談を実施して、教員の研究業績・テーマ・進捗状況などを把握する。
- (3) 科学研究費・大学学術助成金・学術奨励研究助成金などに積極的に応募して、研究の深化を図る。

3 取組状況

DO

- (1) 科学研究費については7件申請し、2件が採択された。
- (2) 大学学術助成金については、1件（代表森田歴史学科長）採択された。
- (3) 遠藤ゆり子准教授が淑徳大学学術出版助成金の交付を受けて、『戦国大名の南奥羽社会－大崎・伊達・最上氏－』（吉川弘文館・平成28年3月）を刊行した。また遠藤准教授は他に遠藤ゆり子〔編〕『伊達氏と戦国争乱』（吉川弘文館・平成28年1月）を刊行した。
- (4) 三宅俊彦教授が共著『チンギス・カンとその時代』（勉誠出版・平成27年9月）を刊行した。
- (5) 淑徳大学人文学部『研究論集 第一号』（平成28年3月）が発行された。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 教員の中にはまだ研究業績が少ない者もいるので、教育活動だけでなく研究活動にも尽力して、少なくとも年に二論文以上は発表することが望ましい。

- (2) 教職関係の科目を担当している教員は、教科教育法などに関する論文を執筆して、非常勤講師に頼らず、専任教員が当該科目を担当できるようにする。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 科研費や外部資金の導入を積極的に行なう。
(2) 最低でも月に一回自己点検・評価委員会を開催する。
(3) 完成年度後のカリキュラム改編・再編に向けて、教職員合同のプロジェクトチームを立ち上げて、完成年度後の教育プログラムを作成する。

以上

10 その他〔ハラスメント防止など〕

関連委員会	ハラスメント委員会
関連部署	総務部
関連データ	

平成26年度大学年報

【次年度に向けた課題】

ハラスメントは、学生間・教職員間でも起こる。よって、未然に防止するための学生に対する研修・パンフレットの作成、ハラスメントが発生した場合に迅速に適切な対応が行える窓口の設置・相談員の選出などに着手する。

1 平成27年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

淑徳大学ハラスメント防止規程に基づき、淑徳大学構成員へのハラスメントを防止し、ハラスメントのない快適な学業・職場環境を保証していくための活動を行う。

(2) 目標

- ① ハラスメントの発生を未然に防止する。
- ② ハラスメントが発生した場合には、迅速に適切な対応を行う。
- ③ ハラスメントが発生した場合には、適切な再発防止策を講じていく。

2 具体的計画

PLAN

(1) ハラスメントの発生を事前に防止する。

ア 教職員に対して、研修会を実施し啓発に努める。

(2) ハラスメントが発生した場合に、迅速で適切な対応を行う。

ア ハラスメント相談員を選出し、ハラスメント防止委員会の下で、迅速な対応が可能となるような体制を構築する。

イ 初期相談のスキルアップと相談員の姿勢など、相談員に必要な研修会を実施し、相談援助技術を高める。

3 取組状況

DO

(1) 前期に、ハラスメント研修会を2回開催した。

ア 1回目では、「ハラスメント防止における相談体制の理解を深める」として、ハラスメント研修の意味、ハラスメント防止規程等の基本的事項について研修した。

イ 2回目では、「ハラスメント研修 スキルアップ研修」として、外部より講師を招いて、講演を受けグループディスカッション等の研修を行った。

(2) 後期に、ハラスメント研修会を1回開催した。

ア 「ハラスメント対応の流れ」及び「ハラスメント相談員のための手引き」等を基に、ハラスメントが発生した場合の受付記録等の具体的な対応について研修した。

(3) ハラスメントが発生した場合に最初に対応する相談員を選出した。なお、相談員にはジェンダーバランスを考慮して各学科及び事務局より選出した。

4 点検・評価

CHECK

(1) 前期の研修会では、多数の教職員が参加し、計画のとおり実施し目標を達成できた。

(2) 後期の研修会では、ハラスメント相談員及びハラスメント委員会構成員を中心にハラスメントが発生した場合の対応を具体的に研修することができた。

(3) 東京キャンパスの相談員を大学ホームページに掲載することにより、学内外に相談窓口の体

制が明示できた。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) ハラスメントは、教職員間のみならず学生間でも起こりうるので、ハラスメントを未然に防止するための学生周知用のパンフレットを作成し、学生間等におけるハラスメント防止を推進する。
- (2) 教職員研修とは別に、学内でのハラスメント防止に向けたポスター等を作成し、掲示することでハラスメント防止を推進する。
- (3) 今年度の研修結果を踏まえ、次年度研修会の内容を検討する。

以上